

ひお

四季報2019年秋号NO2 レポート 小池一三(2019. 9. 2)

組織内資料

堀部安嗣さんからのメッセージを考えてみた



住まい絵本『ぼくんち』 念仏踊りのページ 絵

瀬戸内海に浮かぶ旅客船ガンツウ(設計・堀部)が
アメリカTIME誌が選ぶ
「世界の素晴らしい場所100選」に選ばれました。

World's Greatest Places 2019



Guntu Seto Inland Sea, Japan

A cross between a ryokan and a yacht, this floating hotel has 19 luxurious cabins and sets sail from Onomichi in Hiroshima prefecture before cruising around Japan's Seto Inland Sea. The boat's warm, wood-paneled interiors—designed by architect Yasushi Horibe—give the small hotel an inviting vibe, but the best benefit of setting sail on the **Guntu** is easy access to the sea's over 700 islands. Onshore activities range from a visit to Naoshima, an art-filled island that's home to Yayoi Kusama's famous dotted pumpkins, to sampling soy sauce at a local brewery to excursions with local fishermen. There are more than 10 sailing routes, from one to three nights, and cabins start at approximately \$3,300 per night, all-inclusive. —Amy Gunia

詳しくは <https://time.com/collection/worlds-greatest-places-2019/>

2019秋のセミナーに寄せられた、 堀部安嗣さんからのメッセージ

競争の激しい既存市場を「レッド・オーシャン（赤い海、血で血を洗う競争の激しい領域）」、競争のない市場を「ブルー・オーシャン（青い海、競合相手のいない領域）」と呼び、これからはブルーオーシャンを拓いてゆくことが求められる。

大衆相手としたマーケティングから生まれるものは結局みんな同じ低俗で浅薄なものになり、レッドオーシャンにしか居場所はない。競い合いの末になにも得ることはできないだろう。

私たちの仕事はもうしばらく辛抱すれば、まさしくブルーオーシャンを生きられるのではないか。特にこれからの若い人にはブルーオーシャンを生きてほしい。

堀部安嗣

このメッセージは、メールをお送りしている小池宛の返信に添えられていたものです。

メール本文は以下の通りです。

愚直に墨付け刻みで木造をやっている工務店を勇気づける意味も含め、レッドオーシャン、ブルーオーシャンのことを書きました。町工のみんなもいずれブルーオーシャンを生きられればいいなと思います。すでにシンケンや水田さんはブルーオーシャンにいますね。マイノリティにこそ価値と持続性があるわけです。

これからはそういう時代が来ると思います。

ガンツウと、ベーシックハウスをつなぐものは何だろう？

このメールをいただいた前日に、アメリカTIME誌が選ぶ世界の素晴らしい場所100選に、旅客船ガンツウ(設計・堀部)が選ばれたニュースを知りました。

否が応でも、「堀部さんの頭の中では、瀬戸内海に浮かぶ豪華屋形船と、ベーシックハウスはどうつながっているのだろう」ということに思いが及びました。

私は「里山住宅博 in 神戸」のヴァンガードハウスの設計を、堀部さんに依頼した張本人ですが、それまでの堀部さんは、個の要望(土地と建物)に応え、その設計に十全の回答を出す建築家と評価されていました。そのことは大著『堀部安嗣作品集: 1994-2014 全建築と設計図集』(平凡社)を開くとよくわかることで、それは処女作の「南の家」のお仕事から一貫しているところです。ただそれは、予算が

里山住宅博 in 神戸ヴァンガードハウス 左／松澤稔 右／堀部安嗣



があるとか、お金持ちのクライアントだとかは関係なく、同じ態度で、同じ熱量で接するという点いつも変わりありません。そうして堀部さんはブルーオーシャンの道を拓いて来られたのだと思います。生むのは住まいの設計なんだからと、いつもラフな服装で、ひょいとお宅を訪ねながら。

私が里山博の設計で依頼したテーマは、建築コストに関して「工務店のフィールドの範囲内で」というものでした。里山住宅博の建物は「6ヶ月間の期間限定でモデルハウスを展示すること」を基本にしていますので、ここにいうフィールドとは、建売住宅として売却可能なコストを意味します。建築家の名前を冠し、この制約条件で仕事として成立させるのは容易なことではありません。しかし堀部さんは「請けた仕事だから」というスタンスで臨まれ、不便な現地に何回も足を運ばれ、いつもと変わりなく、いやむしろいつも以上に熱心にこの仕事に取り組まれました。

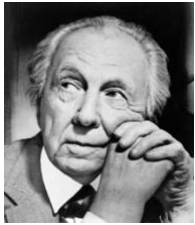
有名建築家は、得てして「特権」を行使します。建築家の中には予算面で工務店が割を食っても致し方ない考える人が少なくありません。自分の「作品」のために犠牲になってくれと……。

ある建築家から私宛に「僕の仕事、どこもやってくれないんだ。予算は厳しいけどさ。どこかいいところ紹介してくれない」という電話がかかって来ました。永田昌民さんに、さてどんなものかと相談したら「自業自得だよ。紹介することないよ」とにべもありませんでした。予算の詰めは、永田さんも厳しかったけど、相手の事情や仕事を理解し、現場監督、職人といい関係を保ち、ぞんざいな対応をされることはありませんでした。

工務店の中には、無理を強いる建築家との付き合いはもう懲り懲りだと言う人が少なくありません。けれど、そんな建築家ばかりではありません。工務店との間でいい関係を長らく築いている例もあまたあります。私が親しくして来た建築家の大半はそんな人たちです。

これからの地域の工務店は、「定番」設計を生む上でも、また中規模木造に領域を広げるためにも、設計者とのいい相互関係を築くことは、とても大切です。

設計の作家性と普通の家の間については、前に奥村昭雄夫人のまことさんの取組みをレポートしたことがあります。末尾に、それを再録しておきます。



フランク・ロイド・ライト



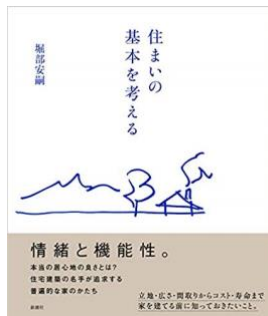
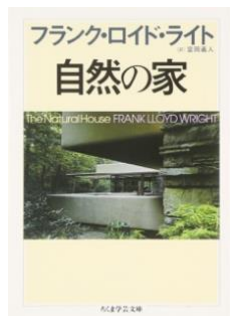
ル・コルビジエ



前川國男



吉村順三



ライトは「ユースニアン住宅 1」(『自然の家』富岡義人訳・ちくま学芸文庫)のなかで「経済的な住宅を開発すること。これは、アメリカにとって建築上の大問題であるばかりでなく、名だたる建築家にとっての難題である」と書いています。ライトは同書に「多少とも自然に信をおく目からすれば、直ちに根無し草と見抜かれてしまう手合いのもの」がニョキニョキと建てられるようになった現実に対して、そうした「おうちの一つを引っこ抜けば、その分風景は改善され、空気は清々しくなる」と言いました。この本は「レッド・オーシャン」に^{まみ}塗れた、当時のアメリカの告発の書でした。

この本を読んだのは 1970 年代の後半で、ちょうど奥村さんと親しくなった頃でした。遠藤楽さんからライトのユースニアン住宅について聞き、それらが私の原点になったようです。

ライトが言う「偽りだらけの住宅」が手当たり次第に建てられている現実、その後も改まることなく、それは堀部さんの建築家としての出発から現在まで、ずっと続いている現実でもあります。

堀部さんは、神戸の取り組みを通じてベーシックハウスとは何かを突き詰められ、幾つかの仕事を重ねられながらまとめられた本が『住まいの基本を考える』(新潮社刊)です。

実践を経ての本なので、述べられている内容に説得力があります。この本を手にしたとき、私はベーシックハウスの最良の教科書が生まれた、と思いました。

この本の一番のポイントは、只今・現在・近未来のベーシックハウスとは何か、ということが明瞭に記されていることです。ライトの古典的な著述から学ぶことは、今なお少なくありませんが、現代日本の諸相は高度化し、複雑です。しかし、当時のアメリカでライトが、「暖められた空気は自ずと上昇する。この作用を利用した暖房を、我々は重力暖房と呼んでいる。」と書き、「下から熱が自然に湧き上がってくると言うことこそ重要なのだ」と言うことに刮目したように、堀部さんは「断熱・気密」に取り組み、びおソーラーも導入されました。居住性への関心と言う点では何ら変わりません。

冒頭のメールをいただく前にも、堀部さんからメールをいただいていた、そこにはこう書かれていました。

つくばの家、お盆に泊まってきました。素晴らしい住み心地でした。通風計画がうまくいきました。

事務所としても一つの完成形ができたのではと喜んでいました。

事務所でのびおソーラーの実績データもまとまってきました。導入した家の建主の満足度は非常に高いです。

この満足度の高さを実現するためには、やはり設計力と住まい手のリテラシーが必要です。これは非常に複雑です。一歩間違えれば失敗します。微妙な心身の揺れ動きを注意深く調整し続けるのは難しいことです。

しかしここが最も重要なところで、ここを多くの人が放棄するので、住宅のカプセル化と画一化が起きるのだと思います。建築をつくるときの思考停止はますます拍車がかかっています。単純化して標準化してダイジェスト化する世の中ですね。

OMからびおに繋がる、この本質的かつ難しいことは、実は設計力、施工力の向上、住まい手のリテラシーの深度に大きく貢献していたのだと思います。

宿谷さんの考えも、この良き複雑さと本質を手放さないところにあるのではないのでしょうか。

そう考えると、びおソーラーやエクセルギー理論は建築設計のよき教育ツールといえるのかもしれない。

このメールを拝読しながら、今の世の中の浅ましが、我々の内なる貧しさにも及んでいて、これに対抗するには、何が肝心で、何が核心かに戻るほかないと痛感しました。詰まるところ、設計力と住まい手のリテラシー(理解力・活用力)の深度を得ない限り、本当のものは生まれれないと言うことです。

冒頭の設題、「ガンツウと、ベーシックハウスをつなぐものは何だろう？」に対する理解は、この堀部さんの短いメールにハッキリと書かれているように思われるのです。



佐藤欣裕さんは、秋田県大仙市大曲で、建築デザイン・工務店一家づくりの仕事をされていて、ホームページに「時代の流れが早く、一時的な思想や流行が世間を掌握する中で、物事の本質をとらえた創作活動ことが普遍的な建築に繋がっていくと信じています。」と記されています。

秋田・もろくす建築社の仕事と考え方(同社ホームページより)

もろくす建築社、佐藤欣裕さんからのメール

先にお送りした「ひお四季報秋号」を、秋田もろくす建築社の佐藤欣裕さんにお送りしたところ、下記の返信をいただきました。

泉さんの材料のお話とても印象的でした。僕はまだまだですが、本当にその通りだと思います。

そしてこれからの(も)建築を変える(または一部取り戻す)のは材料だと思っていましたので泉さんの言葉はとても響きました。後半に「巨きな世界と、目に見えない世界とを可視化する試みと受け止めています」という文章がありました。これは宿谷先生の講義の内容をとても上手に表現されているように思いました。

ご存じかとは思いますが、金子みすゞの詩に「星とたんぼぼ」というものがあります。我々建築を生業とする人間が見えないものをどこまでイメージ・配慮できるかがとても重要なのではないかと思います。宿谷先生は熱力学の世界のそれを気付かせてくれます。また、見える世界の巨きなもの…資金力を持って世論を誘導するメーカーや会社に知らずに流されているこの業界にも注意が必要かと思います。メディアもそういうところがあります。温熱環境の世界一つとっても理屈に合わなくても是としている部分がたくさんありますよね。そういった部分を切り開いていきたい。そう思っています。

佐藤さんが紹介されている、金子みすゞ「星とたんぽぽ」は東日本大震災の時、公共広告機構A C ジャパンによって、テレビに繰り返し流れていました。一般のCMがストップされて、子どもらの映像とこの詩だけが流され、つらい時間にあって、一服の清涼剤のような印象を与えられました。

けれども、復興の掛け声の中で、建築現場で目立ったのは「新建材の洪水」でした。

それは今日、我々の日々の現場においてより顕著です。伝票だけが送られて来て、あたかもジャパネットタカダの取付工事のように運ばれる現場を見ると、利便性に冒されて、工務店はネジが緩んでしまったんじゃないか、という不安に駆られます。

「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。」と射抜く目を、今尚、我々が持ち得ているかどうか、薄ら寒くなります。目を凝らして吟味し、使ってみて、そうしてさらに吟味しなければ、本当のものは見えて来ないからです。

堀部さんは、もろくすの佐藤さんについて、私へのメールの中でこう書かれています。「彼はとても誠実に本質を見つめられる方です。とても期待をしていて、そして尊敬しています。僕も佐藤さんから多くのことを学んでいます。こういう若い人が本来日本の建築教育から多数生まれて来なければいけないのですが…。」

ある日、神楽坂にある堀部事務所を訪ねたら、所員たちによって、ガルバリウム鋼板の見切り部分(端面切断箇所)の錆に関して検討会が行われていました。この鋼材が現れたとき、ガルバリウム鋼板という錆に強い金属板を家の屋根や外壁として使用する事例が多くなっています。

ガルバリウム鋼板は、アルミニウム・亜鉛合金めっき鋼板の名称です。略称ガルバ。

この鋼材が登場する前までは「^{スズ}錫めっき鋼板」通称「ブリキ」でした。安価で、加工もしやすいので使い勝手のいい素材でしたが、錆や腐食の問題が付きまといました。ガルバが登場したとき、ガルバは錆びないからメンテフリー、耐用年数が高いので長寿命、屋根や外壁に使えば断熱性が上がる、軽いので耐震性が高いと喧伝され、工務店と設計者は「夢の鋼材」が誕生したと諸手をあげて喜びました。屋根材は、すっきりとデザインを納められることから、瓦やカラーベストに取って代わりました。

しかし、ガルバリウム鋼板は錆びないわけではありませんし、耐用年数は半永久ではなく10~15年程度で、メンテナンスフリーではありません。断熱性能が上がるというのも間違いでした。

星とたんぽぽ

青いお空のそこふかく、
海の小石のそのように、
夜がくるまでしずんでる、
星のお星はめにみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ。
見えぬものでもあるんだよ。

ちつてすがれたたんぽぽの、
かわらのすきに、だアまつて、
春のくるまでかくれてる、
つよいその根はめにみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ。
見えぬものでもあるんだよ。



金子みすゞ 15歳の写真



淡路の窯元で焼かれた、明石の赤い窯変瓦。



『もののはじめ考』 大阪建設業協会 編 新建築社
1973年 504ページ

建築に関係するさまざまなもののはじまり、発展を、その道の専門家達が83項目に分けてつづった読物集。

【目次】

割栗石の起源について・煉瓦の歴史・左官工事・ガラス製造の変遷・鉄の起源（鉄の建築）・紙障子と板戸・神社建築のはじまり・城と天守のおこり・かえるまたの起源・茶室の起源・風呂の歴史・水洗便器について・「鬼門」説について・さしがね（曲尺）の起源・鉄骨高層建築・透視図の起源とうつりかわり・洋風建築のはじまり（居留地の建築について）・横浜天主堂（聖心聖堂）について・近代吊橋の起源と変遷についてほか

堀部事務所で問題になった、ガルバの見切り部分（端面切断箇所）の錆は、ガルバは表面めっき層によることから、切断など現場加工を行うと、防さび効果が失われてしまい、リフォームを依頼された建物を調べていて、それが目立ったからでした。

最近、堀部さんは燻し瓦に目を向けておられます。それを知った私は、日本一の瓦の生産地、三州瓦の工場に行って調べました。

知多半島の焼き物の町、常滑、半田、高浜、碧南には何回も足を運んでいて、三州瓦の工場については、高浜川沿いに煙突が林立していた記憶がありましたが、全く違った町になっていました。

東大寺の瓦は、渥美半島で焼かれていましたが、製造の場は奈良（大和瓦）へと移り、奈良の瓦師が石州に入り、酸化鉄の来待石を用いて煉瓦防止の赤瓦（石見瓦）を生産するようになり、今度は石見瓦の瓦師が三州にやって来て燻し瓦を焼くようになります。この経緯は、瓦に適した土が見つかり、そして各地の在来工業として産地を形成したことがわかります。

しかし、興隆を極めた三州瓦も、今では燻し瓦を製造している工場は2社しか残っていません。石州では石見瓦の工場が次々と失われ、淡路瓦もそんなふうです。

神戸の住宅博の折、明石・大塚工務店が明石瓦を復活させたいと淡路島で焼いてもらい使われた例がありますが、大塚伸二郎さんの狂わしいまでの執着に及ばずとも、地に拘（こだわ）ることで、地の空気感を感じることができます。瓦産地の形成にみられるように、地と地の繋がりも見えて来ます。

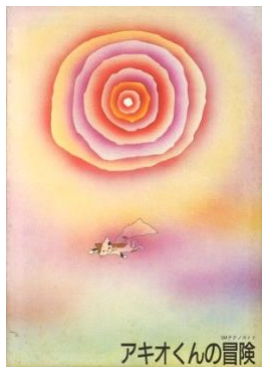
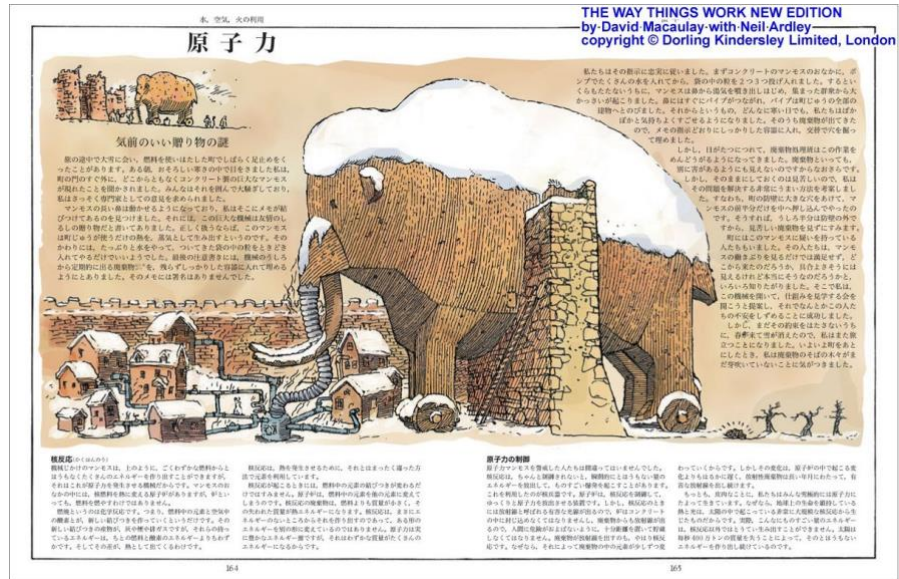
奥村昭雄さんのこと

ずいぶん昔の話ですが、奥村さん設計の仕事を行ったとき、若い現場監督が、奥村さんの設計仕様を見て「こんな建材がありますよ」と言ったら、奥村さんは「昔から使っているものが一番いいんだよ」と諭されました。奥村事務所を訪問したら、書棚に『もののはじめ考』と、丸善刊による建築資料集成『物品』が目に入り、それを購入して読みました。

『もののはじめ考』は、大阪建設業協会が発行していた冊子に連載されたものをまとめた本で、この本が面白くて、私の、建築とモノに関する教養のもとになった本です。1972年発行の建築資料集成



建築資料集成『物品』初版 改訂版（いずれも丸善）



1972 年発行の建築資料集成『物品』は、この刊の編纂を奥村さんが担当されていて、モノの姿図とその寸法の詳細が載っている本です。博覧強記の奥村さんらしいお仕事で、モノの寸法が頭に入っているのは、この本に関わられたからというのではなく、もともとモノについての関心が高い人でした。この意を受けて、当時制作したのが、私がプロデュースした『アキオ君の冒険』でした。とても好評でしたが、マコーレーが著した世界に比べると、このシステムの世界を描き切ったと言い切れないもので、それは結局、私自身の本質的理解の甘さに起因します。

このことについて、次号・びお四季報 2019 秋号 NO3 にくわしく書こうと思っています。

『住まいの基本を考える』（新潮社刊）

【付録】

松原隆一郎さんによる書評 毎日新聞 2019年7月28日より

松原隆一郎 1956年 神戸市生まれ。東京大学工学部都市工学科卒、同大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。東京大学大学院総合文化研究科教授。専攻は社会経済学、経済思想。著書には『経済政策』（放送大学教育振興会）、『ケインズとハイエク』（講談社新書）、『日本経済論』（NHK 新書）ほか多数。

高性能と意匠、情緒の融合志す

ポルトガルにある白壁の町並みのような穏やかさとフィンランドの湖のような透明感を湛（た）える設計で高い人気を誇る住宅建築の名手・堀部安嗣氏。個人住宅が中心であるだけに多くは公開されていないが、宿泊できるクルーズ船「ガンツウ」や田園風景に佇（た）むケーキ店「イヴェール・ボスケ」（加賀温泉）は訪問可能であり、事務所のサイトでも作品群を通覧できる。

堀部氏の住宅は、窓によって屋外をまるで絵画のように切り取る借景の妙や天井の低さが与える隠れ家のような安心感が高く評価されてきた。私はそれに、室内を動くとともに得られる視覚体験を付け加えたい。明るい玄関を入り、階段の暗がりを抜けて二階の大窓に達すると、ベランダの緑が目飛び込んでくる。美しい光景がダイナミックに続くのだ。これは動線が的確に整理されているからこそその視覚体験なのだろう。

その堀部氏の作風にも、近年になって微妙な変化が見受けられる。視覚を中心とする美観だけでなく、身体全体で感じ取られる「住みやすさ」が追究され始めたのだ。「ずっと昔から変わらない建築の価値を大切にしながらも、現代の生活や環境に無理なく適合し、さらには多くの人々が取り

入れることができる技術でつくられる普遍性と応用力を兼ね備えた家」すなわち「ベーシックハウス」である。本書は近年の自作8点の手描き図面に発想の背景となった歴史的建築の写真を添え、考察を加えている。戦後日本では、科学進歩の成果である冷暖房器具により温熱寒冷を強引にねじ伏せる「アクティブデザイン」やコンクリート造の家屋が一世を風靡（ふうび）した。ところが環境問題やシックハウス症候群、冷房の冷やしすぎによる体調不良が注目されると、一転して太陽エネルギーや気候風土をなるべく生かす「パッシブデザイン」に関心が向けられた。国によるエコハウスの推進もその一環だ。

けれどもそうした官製の流行と堀部建築には、かけ離れた印象がある。「現代の生活や環境に対応するには、新たな素材や工法によって、昔の優れたデザインを改良し、新たな手法や考えを取り入れてゆかなければならない」。そのように性能や合理性を高めながらも、意匠や情緒を手放さない点だ。

堀部氏は、環境適合性と情緒がかつての日本建築においては高いレベルで融合していたと言う。それにもかかわらず自然災害の体験から、在来の木造建築には構造的欠陥があるかに思われるようになった。震災で落ちたからと屋根には瓦が使われなくなり、軒庇（のきびさし）も繊細な配慮をもっては配置されなくなった。ところが近年では断熱気密に有利な工法と面で構造耐力をとる工法が融合し、ベーシックな木造工法がひとつの完成形に近づきつつあると言う。「高断熱高気密」により冬暖かく夏涼しいことを実現した「鎌倉大町の家」は、外観が古都の町並みに溶け込む落ち着きを持つ。

歴史や場所にかかわる体感の記憶を根幹に据えつつ環境に逆らわない美しい住宅建築といえ、昭和三年に藤井厚二が時代に先駆け竣工させた環

境共生住宅「聴竹居」と、その設計思想をまとめた同年の『日本の住宅』を思い出す。とすれば本書は、アクティブデザイン盛衰の時期を挟んだその嫡子といえるだろう。

「見たことのない感じたことのないものを作り出」そうとする建築物の傲岸さに飽き飽きした人には、藤井一堀部という系譜が志す「体感の記憶を再現する」住宅が身心に沁(し)みるはずだ。カバーの一筆書きデッサンからも、堀部氏のただならぬ力量が見て取れる。

小池一三の週一回 第10回 設計の作家性と普通の家のあいだ

【再録】

奥村まことは、東京藝大の建築科を卒業した最初の女性建築家です。2016年2月11日に亡くなりました。私は、息を引き取られるときに居合わせ、亡くなる一ヶ月前にお手紙をいただいています。あれからもう2年経ちます。そのお手紙は、空気集熱式ソーラーの現状を憂う痛切なもので、私はそれを「遺言」と受け止め、空気集熱の取り組みを本格的に再開したのでした。

村上藍さんの発表の後、彼女をめぐってパネルディスカッションが行われ、彼女をよく知る人たちから、色々な話がありました。料理の話など、身辺的な話が多かったのですが、戦後すぐに女性建築家の会を共にした方や、吉村順三設計事務所時代の同僚の話などもあって、私の知らない彼女を感じることができてよかったです。

私も手を上げて喋ろうかと思いましたが、そこで話すには少しややこしい話なので、夕方から上野の精養軒で開かれた懇話会の席で、秋山東一さんや真鍋弘さん、ツキデ工務店の築出さん、中村謙太郎さんなどと、あれこれ話しました。

奥村まことの吉村順三設計事務所での仕事

私が、彼女の設計の仕事に関して、ずっと関心があったのは、吉村事務所時代の仕事と奥村事務所になってからの相関性でした。吉村事務所での仕事の一つに「^{こうがい} 筭 町の家」(音楽評論家の遠山一行邸／1958年と1969年)があります。また、彼女らしいと言われる仕事に「湘南の海辺の家」(歴

史学者・羽仁五郎・シュレム邸として建築された2戸1住宅／1966年）があります。共に精緻に満ちた作家性の高い仕事です。

それなのに、奥村まことは生前「私は建築家ではない」と言っていました。

今回の懇話会で聞いたところでは、まことの先生の一人でもある、大家^{たいか}の吉田五十八さんから、同時代で「女流建築家と呼べるのは林雅子だけ、と言われたことが影響しているのかも」という話が飛び出しましたが、人の評価がどうであれ、私の知る限り、彼女の考え方の軸に作家性へのこだわりは希薄でした。

しかし私は吉村事務所時代の彼女を知りません。この二つの仕事は、吉村順三の仕事であり、彼女は一人の担当者でありましたが、吉村事務所の担当者として求められたのは極めて作家性の高い仕事でした。

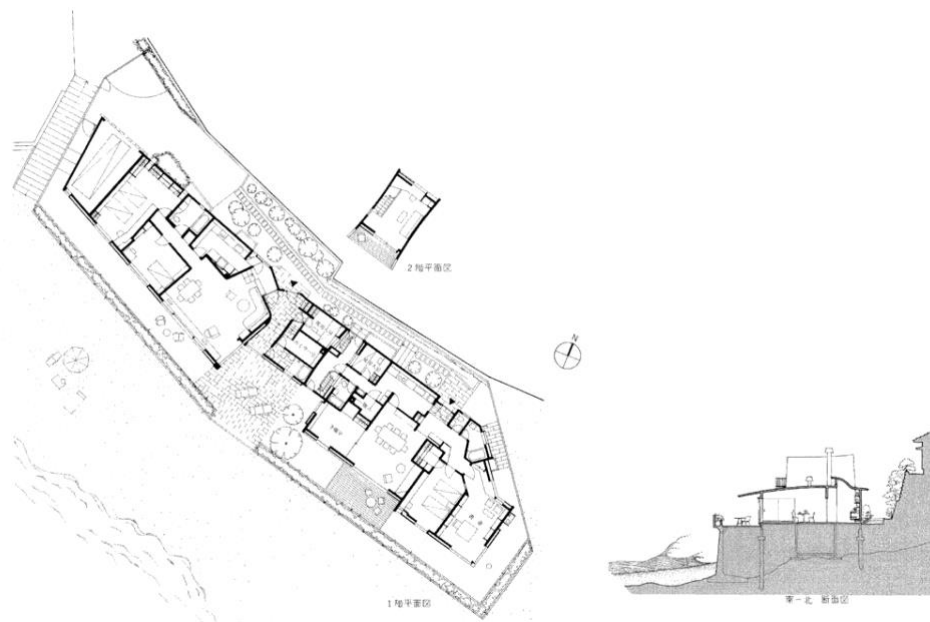
まことが、それに応える逸材であったことは、葉山に建てられた「湘南の海辺の家」が物語っていて、荒海に立ち向かう男性的な力感と、低く抑えられた柔らかな屋根の線が印象的な家です。家主は変わりましたが、今も宿泊（1日1組）できるレストランとして運営されています。

奥村事務所時代の仕事

奥村まことは、1954(昭和29)年に吉村順三設計事務所に入所し、同年に、藝大の二つ先輩の奥村昭雄と結婚し、1957(昭和32)年に娘を出産しましたが、吉村事務所には19年間在籍し、1972(昭和47)年に、練馬区中村橋の自宅内に奥村設計所を設立し、独立しました。

この年は、奇しくも私が住宅業界に職を得た年でもあって、それから6年後に奥村夫妻とおつきあいを開始することになりますが、あの仕事は、独立

して6年目の仕事だったんだ、と今にして思います。



「湘南の海辺の家」（歴史学者羽仁五郎&シュレム邸）

奥村事務所時代の彼女の仕事は、吉村事務所時代と異なって、一様に括れないものがあるように思います。吉村事務所時代の仕事が、作家性の高いものであったのに対し、奥村事務所の仕事では、図面枚数3枚だけのものがあったりして、仕事ぶりが変質したように見受けられます。

私が関係した、浜松の連棟住宅の設計は、昭雄さんが基本設計し、まことさんが担当しました。この仕事は、細部のディテールに及ぶ図面が引かれた。その工務店は「檜造りの家」を標榜する地場の工務店であったので、普段は、それこそ3枚の図面で家を建てる工務店でした。設計図書

が届いたとき、工務店メンバーの驚きは、建築家はこんなにたくさんの図面を引くんだ、というものでした。

地元の工業高校を出たばかりの村松篤（後に OMソーラーの最初のモデルハウスを設計）は、頬を紅く染めながら、まことさんの図面に見入っていたことを、この間のことのように思い出します。

この仕事は、奥村事務所では例外的な仕事だったようです。

昭雄さんの仕事は、他の所員が担当することが多く、密度濃く二人がコンビを組んで行う仕事は数えるほどで、それは台所がきびしい当時の事務所の経営を反映しており、それぞれ別に仕事を行なわれていたように推量されます。

当時、事務所におられた稲田豊作さんは、給料の遅配が半年続いているといった話が伝えられていたけど、新婚夫婦のわが家は食えていたし、赤貧という感じではなかった、殊に事務所での食事は豊かだった、といいます。家が豊かな生活に心配のない所員だけ後回しされたのかも知れません。まことは、そうした見切りに富んだ人でした。

事務所の内情を知った私は、勤務していた工務店に掛け合って、建築家の設計料について論じ立て、それなりの設計料を引き出し、少しでも役に立ちたいと思いました。

けれども、昭雄さんもまことも、設計料の多寡で仕事の質を判断することはありませんでした。まことは、昭雄さんの「作家性」は担保していましたが、この仕事についてみると、二人による仕事だということと、引かれる図面に、慎重かつ細やかな配慮が見られました。

先に述べたように、その工務店はおよそ建築家の仕事と無縁の工務店で、図面がなければ設計意図をかたちにすることができません。図面に慎重な配慮が見られるということは、その工務店に対する教育的配慮があっ

たということです。つまり、ここは詳しく描かなくては相手が困るから、という質のものでした。

まことは、浜松の現場に足繁く通いました。駅に迎えに出るのは私の役目でした。新幹線口の階段を降りてくるまことは、終戦直後に農村に買い出しに出掛けるおばさんのようないでたちで、乗降客の中でひととき目立ち、異相のものでした。階段の途中で私を見つけると、朗らかに手を上げて合図をよこし、改札口に立つ私に、夜っぴて作ったであろう模型や図面を、毎回のよう「はい、これ！」といって手渡してくれました。

彼女の口癖は、自分のことを「まことはね」と、高い声で喋り出すことでした。文中、敬称なく「まこと」と記すのは、そんな少女性を持った彼女に親しみを感じるからで、彼女はまことに天衣無縫の人でした。

しせい 市井のシステムとしての応答解

藝大での村上藍さんの「修論発表」のあとパネルディスカッションで語られた話の中で印象的だったのは、まことは、設計した時間を記録することを殊のほか大事にし、所員にも奨励していたことでした。

彼女はメモ魔だったので、その記録は B5 のノートにびっしり記録されていて、私がそれに感心を寄せると嬉しそうにそのわけを喋ってくれました。こういう場合、昭雄さんのそれは長口舌のもので、話し出したら 2 時間は覚悟しました（一説には 4 時間）。

まことのそれは、軽快かつ端的なもので、薫風^{のんど}喉より来たるといった感じの説明でした。奥村事務所での彼女の仕事は、図面枚数 3 枚だけのものもあれば、浜松の連棟住宅のように念入りなものもありました。時間をどれだけ掛けるかを設計料の算定根拠になるのですが、予算がないからといって簡単

な図面で済ますというのではなく、設計の質と、それを施工する大工・工務店の実力の読み取りを前提にされていたように思います。

浜松の連棟住宅は「秘技^{ひぎ}」とされる「煙道熱交換ストーヴ暖房」を設計に盛り込んでいたり、また、吉村事務所がオハコとしたラワンベニアを内装に用いたり、「吉村障子」や、山吹色の鳥の子の和紙を引き戸に用いたり、という展開で、それを建築家の仕事の何たるかを知らない工務店で施工しようというのですから、たくさんの図面と現場での立ち会いと、くどいまでの直接指導を必要としました。

当時、私が所属した工務店のメンバーはパニックに陥りましたが、奥村事務所の勝手を知っている、例えば渋谷の広・佐藤工務店さんや、甲府の小澤建築工房あたりなら、あ・うんの呼吸でやれるわけです。

まことの方では、平面と断面の寸法があれば、やってもらえるというアテがあり、お施主の懐具合や、設計に臨まれるものを勘案しながら、ムリなく運べると見ていました。それは、まことの仕事を何回も経験し、仕事の練度、経験知あつてのことで、仕事の納め方の「職人性」ということが、そこにあったように思います。

ある時、秋山東一さんのフォルクスハウスについて、まことに「どう見ておられますか」と聞いたことがあります。まことは、実にはっきりと「システムハウスという言葉が嫌い」と言い放ちました。

フォルクスハウスは、ベースとゲヤ、グリッドとモジュールによるシステムハウスだと盛んに喧伝していたので、それを指して言われたのですが、彼女は、もっぱら住む相手や工務店の内情に合わせて設計する、というやり方であって、あたかも芝居小屋の座付作者のように図面を起こし、納めることをモットーにしていたので、俄仕込みのやり方を好まず、こういう物言いに^{にわか}なったのだと思います。

当時の建築家は、何しろ設計枚数が多く、吉村事務所は原寸ということを手頭において設計していましたので多く、この流派の流れを組む永田昌民さんなどは100枚を超える^{おびただ}夥しい数の図面を、毎回、手書きで起こしていました。まことも、そういう「作家」の世界を生きた人でしたが、ある時、そんなプロセスを必要としないで済む仕事があることを悟ったように思われませんでした。

吉村事務所では、高水準な仕事で知られる水沢工務店であっても、毎回、膨大な図面が起こされました。それは15%を超える高い設計料に見合う「商品」であり、それだけの時間を要したことを表す証あかしでありましたので……。

しかし、まことが身近に接している人や、予算がないけどいい家を欲する人の仕事に、それを強いるのは酷だと思ったのでしょうか。かといって「設計を原寸で考える」という作法を捨てたわけではなく、それをいつも頭に置きながら、図面枚数3枚の断面と、立面と。配置図と平面図で表し、それをちゃんとこなし得る工務店があれば成立することを、数ある仕事の応答解を通じてつかんだのではないか、と思われるのです。

真鍋弘さんから、「長年の吉村事務所時代の修羅場が彼女にそれを可能にさせたのでしょう。キャベツでもレタスでも包丁を使わずに食べる。そのほうが旨いという。彼女の設計の仕方とどこか似ていますよね」とのコメントをいただきました。

まことは、たいがいの仕事を受け請いました。昭雄さんに好きな仕事をさせ、事務所の経済をまかなうということもありましたが、まことは、それで幸せになれるお施主が沢山いることを知ったのです。

このやり方は、平面と材料が決まれば、たちどころに空間化される日本の伝統的な木割術の現代的応用といえないでしょうか。江戸後期から明治時代

の普請道楽の施主と職人の関係を見ると、相互に言葉を多く用いることなく、「あれ」「あれですね」という片言で通じたという話を何かで読んだことがあります。この通じ合いというか、現代的にいうなら「協同・協働性」ということになるのかもしれませんが……。

ベーシックハウス or スタンダードハウス考

私の年来の関心は、日本の普通の家をステキなものにすることです。

その方法としてのベーシックハウス or スタンダードハウスに、ずっと取り組んできました。建築家の秋山東一・三澤康彦と三澤文子・石田信男・半田雅俊・稲田豊作・趙海光・郡裕美・村松篤各氏との仕事、最近では堀部安嗣氏と組んでの一連の仕事は、空気集熱式ソーラーと、近くの山の木で家をつくる運動などと並んで、私のライフワークとするところです。

今回の藝大での「修論発表会」を通じて、まことのやり方は、彼女が嫌う「システム思考」そのものではないか、とふと思ったのでした。

それは山本周五郎の小説のように平明で、気負うことない日常的な作法としてあり、建築家と工務店のよき関係を生み出すものでした。図面 3 枚で、まことらしい世界がカタチになるということは、練度を積んだ工務店あつての協同・協働の仕事であり、それ自体、一つのシステムハウスというべきではないか、と思うのです。私はそれを「市井設計システムとしての応答解^{しせい}」と規定しました。

まことは、建築主の家に出向いて、家族の話を聞き、生活ぶりや家具を丹念にスケッチして仕事に取り掛かります。そこは、どの建築主に対しても丁寧でした。その応答を通じて図面を起こし、勝手知ったる工務店と組んでたくさん家をつくりました。

それは、工務店がやってきた「注文住宅」の手法に似ているようで、根本のところが違います。まことのそれは、「作家」として住宅を生んできた背景を持っていて、その裏付けを持った仕事であったからではないでしょうか。